

【テーマ】

□ 万葉歌を読めば時代がわかる(1)

～奈良時代―人民の苦しみ・防人の歌①～



公民館だより

2018年7月27日(金)

番外編・第4号

奈良市 二名公民館

館長 上田善紀・発行

■ 世界遺産「古都奈良の文化財」の構成資産である「平城宮跡」。世界に誇れる…、そんな古京「平城京」ですが、別角度から見れば実は「搾取」の政府でもありました。

ここで、中学・高校時代の日本史の学習を復習してみましょう。当時の税制についての話です。「租・庸・調」―こんな歴史用語を覚えていませんか？

(1) 租 … 6歳以上の男女に与えられた口分田の収穫高から3%を納める税。各国に置かれた正倉（中央・地方に設置された租税などを収納する施設）に納められました。

(2) 庸 … 本来は労役を提供する税でしたが、代用として布や米を都に納めました。

(3) 調 … 諸国の特産品としての繊維製品や水産物を都に納めました。

なあんやあゝ、大したことないじゃあないかゝ。

収穫高の3%。「4公6民」・「5公5民」などといわれた江戸時代の税制度からすれば、たかだか3%…、＼ラクショー～ですよ。お国自慢の特産品？ 自慢して納めますよ。

いやいや、しかし。実は…。

「租」は国衙（諸国の政庁）に納める税ですが、「庸」と「調」は奈良の都に運ばれ、国家の財源となっていました。農民の中から選ばれた「運脚」という役が都まで運びます。むしろ食料は自弁です。例えば、駿河国（静岡県）からは行き18日、帰り8日程度を要したようです。行きに多くの日数がかかっているのは運搬物が多いために1日に進む距離が短いためです。

いやいや、しかし…、という話はまだまだ続きます。

「租・庸・調」以外にも、実はまだまだ人民に対して負担を強いることがあったのです。

(4) 雑徭 … 国司の権限で労働力を求める税もありました。成人男子は、1年間に60日も働かされました。

(5) 中男作物 … 中男（\*17歳～20歳）の未成年者に課せられた税で、郷土の産物を作つて納めさせました。

(6) 公出挙 … 利率3割～5割で農民に強制的に稲を貸し付けるものです。



(7) 仕丁…50戸ごとに1人の割合で労働力を提供させる税で、あと1人を世話役として付けることで、結果的に50戸ごとに2人が徴用されました。

(8) 兵役…1戸から1人の割合で地方の軍団で軍事訓練を受けるもので、実質的には労働力の徴用でした。都での衛士、筑紫地方の警備につく「防人」などが含まれていました。

(9) 贄…天皇や神へのお供えとして納められました。

前置きが長くなりました。今回のテーマは「(8)兵役」であった防人の歌です。まずは、中学校のたいていの教科書に掲載されている「横綱級」の作品を紹介しましょう。

父母が 頭かき撫で 幸くあれて いひし言葉ぜ 忘れかねつる

丈部稻麻呂 卷二〇—四三四六

父母が私の頭をなでて無事でいろよと言った言葉が忘れられない。

なんともせつなく胸つぶれる状況でしょうか。防人として、これから出征する私の頭をかき撫でて「元気でいろよ」とお父さんとお母さんがいったのです。その言葉が任地に向かう道中、丈部稻麻呂さんは忘れられず思い出しているのです。

防人とは、筑紫、杵岐、対馬など主に北九州沿岸の防衛にあたった兵士たちのことです。「崎守(さきもり)岬を守る」の意味だと考えられています。

防人には東国の人たちが選ばれました。この場合の東国とは現代でいえば「東北地方」ではなく「関東・東海圏」ということです。いずれにしても、やすやすと逃げて帰れないような遠方だからです。「言葉」を「けとば」と発音していますが、これは駿河国出身であった丈部稻麻呂さんの静岡なまりです。

防人の任期は3年、毎年2月に兵員の3分の1が交替することになっています。しかし、実際にはそう簡単には国に帰してはもらえなかつたようです。

東国から部領使(=ことりづかい)という役人が引率します。もちろん徒歩で北九州まで行くので辛い旅だったことでしょう。彼らは、自国から隊伍を組んでまずは都である奈良に向かいます。だいたい200〜300人の隊列であったといえます。奈良から難波へ、そしてそこからは船で北九州に向かいました。帰りは自費でしたので、帰るに帰れない人もいたり途中で行き倒れとなったりした人もいました。

防人歌は、主に万葉集最後の巻である「巻二十」に98首が収められています。多くは、旅の途中で設けられた宴席で披露された歌を部領使が書き留めたものです。防人を統括する任にあたっていた兵部省の兵部少輔であった大伴家持が部領使に命じて集めさせた166首から家持が選んで84首を残しました。

防人歌は、妻や恋人、父母など愛する人との別れなど愛惜の情に満ちた歌が多いのが特徴で、防人自身のほか、妻や父が歌ったものも収められています。総じて飾り気がなく素直な歌ばかりです。家持の文学的な思慮がなければ、防人の歌とそれによって明らかになった史実を、現代の私たちは知ることが出来なかつたことでしょう。